

## 新しい生活様式?! —知的障害のある方の通所事業所で今考えること—

社会福祉法人せたがや檍の木会 上町工房

斎藤 由子

(コロナ禍 障害特性への理解 合理的配慮)

### 1. はじめに

当所は、18歳以上の知的障害のある方の就労支援継続B型事業所として、①働くこと②身体つくり③仲間つくり④余暇支援を4つの柱として日々のプログラムを組み立て、主体性が發揮しやすい場面を意図して盛り込みながら、自分らしく力を發揮し、仲間と共に充実した生活を送れることを目指している。

今年は、『新型コロナウイルス』の流行という今までにない状況の中、感染予防対策を行いつつ、いかに安全に、ニーズに合わせたサービス提供・事業所運営ができるかも大きなテーマとなった。そのような中での当所の取り組みを紹介し、知的障害のある方を支える私たちに必要な視点を考察する。

### 2. 工房での感染症予防対策

2月頃より『コロナ』の話題は常に聞かれるようになり、国や都・区からも、予防対策や補助金、感染症発生時の対応等々の情報が次々と提供されるようになる。様々な情報が交錯する当初、職員間でさえ、統一した見解、方針を持つことの困難さもあったが、その時々の状況に合わせながら、情報収集に努め、意見交換をしながら現実的なできるだけの対策を講じてきた。



4～5月の緊急事態宣言中も、事業所は、『生活の維持に必要不可欠なもの』との捉えから閉所はせず。感染予防の観点から、『可能な方はできるだけの通所自粛』依頼は行い、希望に合わせて在宅支援を実施。通常の5分の1から3分の1程度の通所人数となった。6月、緊急事態宣言解除後は、全体の半数ずつの通所を提案。通常の半数から3分の2程の通所となり、人数は徐々に増加。現在は、それぞれの体調や障害特性、ご家族の状況、通所経路等、個々に合わせて利用いただき、通所者はほぼ通常通りとなってきた。工房内での感染予防（手洗い、アルコール消毒、換気の徹底、密を避けた活動、ビニールパーテーションや個々に合わせてのマスク・フェイスシールドの使用、食事時の人数調整、食器の高温洗浄・乾燥等）や、希望の方への在宅支援（毎日の電話やメール連絡・相談、個々に合わせた過ごし方の提案・作業物の配布等）は継続中である。

### 3. 利用者の皆さん様子

急に、手洗い・アルコール・マスクなんて皆から言われ、プログラムや行事の変更が相次ぐイレギュラーだらけの日々。状況を理屈で理解するのではなく、経験を通して少しづつ自分達の解釈を作っていくような、知的に障害のある方たちにとってのこの状況は、かなりの戸惑いや不快さがあったはずである。外出の制限や多くの予定変更、また周囲の不安を感じ取り、不安定になる姿も当然多く見られた。

しかし、そんな納得がいかないようなことでも、一生懸命に状況を受け止めようしたり、応じようとする姿も見られ、皆さんの邪気のなさや寛容さ、強みに改めて気づかされる思いがした。抑圧ではなく、この人がそう言うから合わせてみようかと思ってくださるような、日頃からの和やかな関係性を築

くことの大切さも感じたところである。

マスク着用や、プログラムの場所・時間の変更等、難しいと思っていたことにも、少しづつ慣れてきている今があり、私たち伝える側の配慮や工夫、努力の必要性も感じた。一人ひとりに合わせた求め、安心できる場所や人、日常のルーティン、気持ちや楽しみを共有、発揮できる機会、無理なく少しづつ進める時間の保障が、不安定なこの状況下での過ごし方のポイントとなっている。

#### 4. 考察

緊急事態宣言中、まだまだ不明なことも多く、『買占め』によって必要な日用品が手に入りづらかったり、『新しい生活様式』を一律に求められるような風潮や、感染者が『悪者扱い』されるような雰囲気もあったり、そんな不安な状況下、日頃から、障害特性や個々に合わせた配慮が大切な皆さんをどう理解してもらうのか、私たちは何ができるのか、何をするべきか、当惑した当初だった。

福祉施設だってテレワークで良い、外に出ず家にいる方が安定して過ごせる、人との接触やお楽しみ事はこれを機に、今後も極力減らしていくべき。そんな意見からは、『新しい生活様式』への移行ではなく、5~60年前、障害者の社会参加が今より難しかった時代、他者と関わらず、一律に家や施設の中で暮らすことが普通とされた時代の、『古い生活様式』へと逆向していくような違和感や不安も覚えた。

多少のトラブルがあっても、社会の中で暮らしていくことが当たり前、人との違いを認め合うことが、結局は皆の暮らしやすさに繋がるのだと、折角少しづつ進んできた障害者理解、多様性の考え方を再度整理し、正しく発信していく必要性を感じるところである。このコロナ禍によって進んだ様々なオンラインサービス、デリバリー等は大いに活用していきたい。同時に、目に見える形となって残る表現や成果だけではなく、隣にいて、互いの気持ちの機微、微妙な変化を読み取ってこそそのやりとりや関わりから生まれる安心感や力の発揮、他者の刺激があってこそその充実感や成長があることも忘れずにいたい。

感染リスクを下げるために、必要なプログラムまでも安易に中止とならないよう、予防対策に疲弊したり、楽しむことまで自粛するべきという雰囲気にならないよう、一つひとつの活動の意図を考え、かつできる限りの安全対策を行い、新たなやり方や方法の模索を継続していきたいと思う。

~~~~~

<助言者コメント>

橋本 瞳子（社会福祉法人大三島育徳会障害者支援局長）

知的に障害がある皆さんにとって生活の見通しが立たないことや、生活の変化は大きなストレスになります。緊急事態宣言の中にあっても事業所を閉所せず、利用者ニーズに応えるために様々な工夫をされたことだと思います。取り組みでは、利用者の不安に対して、ルールを押し付けるのではなく職員との「日ごろからの関係」の大切さと職員の伝える側の努力の大切さを確信されています。

さらにコロナ禍での行事見直しは、全社会的な課題でしたが、恒例のグランサマーフェスを中止するのではなく、オンラインでチャレンジしたことは、本当に利用者に喜んでもらう取り組みです。事業所もそれぞれ特徴がありますが、「楽しむことまで自粛するべきという雰囲気にならないよう」という言葉に事業所が目指している、働くこと、身体作り、仲間づくり、余暇支援の4本柱が、しっかりと表現されており、非日常になっても貫くために努力されていることを感じました。それが利用者の安心感や満足感に繋がっていると思います。

フラの音楽が、コロナに負けないように気持ちを明るくしてくれますね。楽しい発表でした。